８　次の文章は、『宇治拾遺物語』の一節である。を飼って暮らしをたてていた男が、山奥の木の上にある鷹の巣に近づこうとして深い谷に落ちてしまった。崖に差し出た木の枝にひっかかりかろうじて死を免れたが、従者たちは死んだと思い込み、家に帰って妻子にもそう伝えた。以下の文章は、それに続くものである。これを読んで後の問いに答えよ。

〈宮城教育大〉二〇一九年度出題

　さて谷にはすべき方なくて、石のそばの、の広さにてさしでたる片そばに尻をかけて、木の枝をとらへて、少しもＡみじろぐべき方なし。いささかもはたらかば、谷に落ち入りぬべし。いかにもいかにもせむ方なし。かく鷹飼を役にて世過ぐせど、幼くより観音経を読み奉り、たもち奉りたりければ、「助け給へ」と思ひ入りて、ひとへに頼み奉りて、この経を夜昼いくらともなく読み奉る。「」とあるわたりを読む程に、谷の底の方より物のそよそよと来る心地のすれば、「何にかあらむ」と思ひて、やをら見れば、えもいはず大きなるなりけり。長さ二丈ばかりもあるらむと見ゆるが、Ｂさしにさしてはひ来れば、「我はこの蛇に食はれなむずるなめり。悲しきわざかな。観音助け給へとこそ思ひつれ、こはＣいかにしつる事ぞ」と思ひて念じ入りてある程に、ただ来に来て、我が膝のもとを過ぐれど、我をａのまむとさらにせず。ただ谷より上ざまへ登らむとする気色なれば、「いかがせむ、ただこれに取り着きたらば、登りなむかし」と思ふ心つきて、腰の刀をやはら抜きて、この蛇の背中に突き立てて、それにすがりて、蛇の行くままに引かれて行けば、谷より岸の上ざまにこそこそと登りぬ。その折、この男離れてくに、刀を取らむとすれど、強く突き立てければ、え抜かぬ程に、引きはづして、背に刀さしながら、蛇はこそろと渡りて、向かひの谷に渡りぬ。この男うれしと思ひて、家へ急ぎて行かむとすれど、この二三日、いささか身をもはたらかさず、物も食はず過ごしたれば、影のやうに痩せさらぼひつつ、かつがつと、やうやうにして家に行き着きぬ。

　さて家には、「今はいかがせむ」とて、跡とふべき経仏の営みなどしけるに、かく思ひかけずよろぼひ来たれば、驚き泣き騒ぐ事限りなし。かうかうの事と語りて、「観音の御助けにて、かく生きたるぞ」と、ｂあさましかりつる事ども、泣く泣く語りて、物など食ひて、その夜はやすみて、つとめてとく起きて、手洗ひて、いつも読み奉る経を読まむとて引きあけたれば、あの谷にて蛇の背に突き立てし刀、この御経に、「弘誓深如海」の所に立ちたり。見るに、いとあさましなどはおろかなり。「こは、Ｄこの経の蛇に変じて、我を助けおはしましけり」と思ふに、あはれに貴く、かなし、いみじと思ふ事限りなし。そのあたりの人々これを聞きて、見あさみけり。

　今さら申すべき事ならねど、観音を頼み奉らむに、そのなしといふ事あるまじき事なり。

注

○石のそば＝石のとがっている角。

○折敷＝食器を載せるのに用いた角盆。

○観音経＝『法華経』巻八「」の別称。観音の功徳が説かれている。

○たもち奉りたりければ＝自分の守るべきものとして大切にし続けていたことをいう。

○弘誓深如海＝経の中の一句で、生きとし生けるものを救おうという菩薩の誓いは海のように深いという意味。

○丈＝長さの単位。約三メートル。

問１　傍線の部分ａ・ｂの解釈として最も適当なものを、次の各群のア～エの中からそれぞれ一つずつ選べ。

ａ　のまむとさらにせず

　　ア　のみ込もうとはしばらくの間しない

　　イ　のみ込もうとはむやみにはしない

　　ウ　のみ込もうとはいっこうにしない

　　エ　のみ込もうとはどういうわけかしない

ｂ　あさましかりつる

　　ア　しみじみと心うたれた

　　イ　痛快でわくわくした

　　ウ　あきれるほど不思議だった

　　エ　恋しく切なかった

問２　傍線の部分Ａ・Ｃを現代語訳せよ。

問３　傍線の部分Ｂについて、「さしにさしてはひ来れば」とあるが、どのようなことを述べているのか。わかりやすく説明せよ。

◎問４　傍線の部分Ｄについて、男はなぜ「この経の蛇に変じて、我を助けおはしましけり」と思ったのか。四〇字以内（句読点を含む）で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝ウ　　ｂ＝ウ

問２　Ａ＝身動きできるがない

「術」は「方法」「手段」も可。

　　　Ｃ＝いったいどうしたことか

「いったい」はなくても可。

問３　大蛇がＡ谷底から男の方に向かってＢ真っ直ぐに這ってきているということ。

「大蛇が男の方に向かって這ってくる」の意がなければ全体０。

Ａがなければ減点２。Ｂがなければ減点２。

問４　Ａ谷で蛇の背中に突き立てたはずの Ｂ刀が、自宅の経に刺さっているのを見つけたから。（38字）

Ｂがなければ全体０。

Ａがなければ減点５。

　　　［別解］男はＡ幼い頃から信心深く、Ｂこの時も助けてほしいと願って観音経を読み続けていたから。（40字）

Ａ＝７〔幼い頃からずっと観音信仰していた旨があれば可。〕

Ｂ＝３

【現代語訳】

　さて谷では（男は）どうすることもできなくて、石のとがっている角で、角盆ほどの広さに飛び出ている一端に腰掛けて、木の枝を握って、少しも問２Ａ身動きできる術がない。少しでも動けば、きっと谷へ落ち込むに違いない。どうにもこうにもしようがない。このように鷹飼いをに世を渡っているが、幼い時分から観音経を読み申し上げ、（自分の守るべきものとして）大切にし続け申し上げていたので、「お助け下さい」と深く念じて、ひたすらお祈り申し上げて、この経を昼も夜も何度となく読み申し上げる。「弘誓深如海」と（書いて）ある辺りを読んでいる時に、谷の底の方から何かががさがさとやって来る気配がするので、「何であろうか」と思って、そっと見てみると、なんとも言いようのない大きな蛇であった。長さは六メートルほどもあるだろうと思われる（蛇）が、真っ直ぐに（こちらを）めざして這ってくるので、「私はこの蛇にきっと食われてしまうに違いないようだ。悲しいことだなあ。観音よお助け下さいと念じていたのに、これは問２Ｃいったいどうしたことか」と思って一心に祈っているうちに、（蛇は）ひたすらどんどん進んで来て、自分（男）の膝のそばを通り過ぎていくが、自分を問１ａのみ込もうとはいっこうにしない。ひたすら谷から上の方に登ろうとする様子であるので、「どうしようか、とにかくこれにしがみついたら、きっと（自分も蛇と一緒に）登ってしまうだろうよ」と発想が浮かんで、腰の刀をそっと抜いて、この蛇の背中に突き立てて、それにしがみついて、蛇の進むままに引かれて行くと、（蛇は）谷から崖上の方にそろそろと登っていった。その時（＝崖の上まで登りついた時）、この男が（蛇から）離れて飛び退く際に、刀を取ろうとするけれども、強く突き立てていたので、抜くことができないうちに、（男を）引き離して、背に刀を刺したまま、蛇はそろりと移動して、向こう側の谷に渡ってしまった。この男は喜ばしいと思って、自宅に急いで行こうとするが、この二三日、少しも身体を動かさず、何も食べないで過ごしていたので、影のように痩せ衰えながらも、どうにかこうにか、やっとのことで家にたどり着いた。

　さて家では、（男の妻子が）「今頃（男は）どうしているだろうか」と言って、（男の）亡き跡を弔うのに必要な読経の営みなどをしていたところ、（男が）このように思いもよらずよろめいて帰って来たので、（妻子は）驚いて泣き騒ぐことこの上ない。（男は）これこれの事と説明して、「観音の御助けによって、こうして生きているのだよ」と、問１ｂあきれるほど不思議だったことの数々を、涙ながらに語って、食事をして、その夜は眠りについて、翌朝は早く起きて、手を洗って（清めて）、いつも読み申し上げている経を読もうと思って（経を）手にとって開いたところ、あの谷で蛇の背に突き立てた刀が、この御経に、「弘誓深如海」の箇所に（刺さって）立っていた。見ると、たいそうあきれるほど不思議であるなどという言葉では言い尽くせない。「これは、この経が蛇に変身して、私をお助け下さったのだ」と思うにつけても、しみじみと崇め重んじられ、心にしみて、すばらしいと思う事この上ない。その近所の人々もこの話を聞いて、見て驚きあきれた。

　今さら申し上げなければならない事ではないが、観音におすがり申し上げているならば、その霊験がないということはあるはずがないということである。